

日本の中国観研究（15）（2018.9－2019.8）

—比較文化的事例研究—

藤 田 昌 志

Japanese “Perception of China”（15）（2018.9－2019.8）

—Case Studies in Comparative Culture—

FUJITA Masashi

〈Abstract〉

How did Japan think about and perceive China historically? It is very important for the Japanese to understand their history by considering Japan's relationship with neighboring countries. Moreover, it is also critical to know how Japan perceives China in the present as we grapple with desirable relations between Japan and China. I would like to examine the Japanese “Perception of China” in this study, as I have done in my previous research. I have identified books on China that excellently reflect Japan's “Perception of China”; these books have been published in Japan for this one year. In this study, I have classified these books into four categories, as I did in my past research, and studied each book and clarified the Japanese “Perception of China” in the present one year.

キーワード：文化大革命 精日 「日出処」「和漢の境を紛らかす事」【典拠】

1 序

北朝鮮の金正恩朝鮮労働党委員長とアメリカのトランプ大統領の二回目の会談（2019年2月27日、28日の両日、ヴェトナムの首都ハノイで行われた）はうまくいかず、その結果、北朝鮮はロシアや中国に接近した。2019年6月下旬のG20が大阪で開催される一週間前の6月20日、中国の習近平国家主席は北朝鮮・平壤に到着し、二日間の訪問中、金正恩朝鮮労働党委員長と会談した。核の全面廃棄か部分廃棄かで北朝鮮とアメリカで考えが一致

しなかったことに起因するのであろう。G20 後の米朝サプライズ会談はトランプのイメージ戦略であろう。アメリカの二者択一的で、強圧的な態度は他国からも嫌悪されている。北朝鮮が核開発を本格的に行い始めたのは、1989 年の米ソ冷戦終結後である。中国もロシアも、緩衝地帯としての北朝鮮の崩壊を望みはしない。日本は天安門事件以降、アメリカのチャイナ・ウオッチャー的視点から中国を見るのが常態化している。かつての「尊崇」という中国観は今の日本には存在しないと言っても過言ではない。こうした状況のなかで、この一年の日本の中国観について、日本で出版された書籍の中から考察したいと思う。

2 日本の中国観研究 (2017.9-2018.8)

I 社会関連書籍 (政治・経済を含む) 考察

楊繼繩著 辻康吾編 現代中国研究会訳 (2019.1)『文化大革命五十年』
岩波書店

本書は楊繼繩氏の (2016)『天地翻覆-中国文化大革命史』香港・天地圖書有限公司 を底本として、氏がそれに大幅な改訂を加えた新稿、そして『天地翻覆-中国文化大革命史』の「導論」部分に手を加えたものを合わせて、氏の文革論として、辻康吾氏が構成した書である (編者 あとがき p.233)。

辻康吾氏は編者として、著者の提議した新しい文革認識に注目し、以下の 3 点について論評を加えている (同 pp.234-236)。第一に、従来の論では文革を造反派 (文革派) と実権派の抗争として、「加害者」としての前者の、「被害者」としての后者への迫害及び文物破壊として描いてきた (1981 年の「建国以来の党の若干の歴史的問題についての決議」と同じ) が、本書の著者である楊氏は文革後、実権派=官僚による特権独裁体制が全面的に復活、強大化し、それが現在中国であると文革後も視野に入れて考えている。第二に、文革時期の流血事件の凄まじさについてであり、公式では文革の犠牲者は死者 40 万人、被害者 1 億人とされているが、実際にはその数百倍の人々が犠牲になったことが明らかにされている。第三に、本書から得られた最大の教訓は、中国政治の本質は林彪が言ったと言われる「権があれば全てがある」(“有权就有一切”) という一言に尽きるということである。辻氏は文革を過去のこととしてではなく、現在中国との連続で捉えている。中国社会の矛盾の発露としての「文革」は、現在でも起こる可能性があると考えているようである。

本書の末尾は次のような言葉で終わっている。「権力の抑制均衡、そして資本を制御する制度を樹立することが社会の必然的要求である。その制度こそが立憲民主制度なのである」

(p.230)。世界の現状をみると、西型立憲民主制度が形式化し、国家、民主主義自体が富の圧倒的少数者への偏りに呼応して存亡の危機に瀕し、国家主義が台頭している現状で、「立憲民主制度」に解決を見出そうとするのは、果たして賢明であろうか。中国は、自らの平民発展時代と君主専制時代が併存していた（内藤湖南の説）宋代などの政治形態に学ぶべきではないだろうか。

古畑康雄（2019.1）『精日 加速度的に日本化する中国人の群像』講談社
講談社+α新書

古畑康雄氏は共同通信社編集局国際情報室次長。同社の中国語ニュースサイト「共同網」を企画・運営している（奥付による）。

中国の王毅外相は2018年3月の全国人民代表大会で“精日”について“中国人的败类”（＝「中国人のクズ、売国奴」）と言った（p.5 まえがき）。しかし、古畑氏によると“精日”とは元来は、日本社会の礼節や文化を敬愛し、日本人的な生活を送りたいと考えている人々のことだったが、中国政府により「日本軍服を着て、日中戦争を日本の側に立って肯定する、中国人にあるまじき、ならず者」というような定義を下された言葉である（p.56）。台湾の“哈日”には日本精神を持った「日本語世代」というバックボーンがあるが、中国の“精日”には「日本に対するネガティブなイメージが強い」（pp.41-42）。

“精日”の語源は“精趙”というネット流行語で、それは「本来は趙家（魯迅の『阿Q正伝』の地方の名家「趙家」が出典）の人間ではないが、精神的には趙家の人間だと思っている人（＝阿Q）」で、“权贵”（特権階級エリート、いわゆる「赤い貴族」）を隠語で「趙家人」と呼ぶのが流行っている（p.57）。“精日”とは「本来は日本人ではないが、精神的に自分を日本人と同一視している人」である（p.57）。中国の社会、政治、文化の発展の必然的結果が“精日”であり（p.109）、経済的に豊かな中国人ほど日本に対して好意的と言える（p.118）。

「中国」のネーションとは何か。“精日”は中国のネーションにとって一つの脅威となりうる。中国共産党を批判しない限り、アニメ、スポーツ、ライフスタイルなどの点で日本に親近感を持つ「マイルドな精日」は問題ないであろうが、自分を日本人と同一視して共産党政権下の中国への帰属意識を持たない「ハードな精日」（pp.73-74）は中国共産党によって批判されるであろう。そもそも「中国」のネーション（国家[ステート]としての一体感、共通意識を持つための統合の精神的、人的要素）とは何か、常にそのことが問われている。したがって、中国共産党は一貫してアナーキズム（無政府主義）を排斥し続けている。とはいうものの、中国の根底には“大一統”（統一を尊ぶ）とアナーキズム（無政府

主義)が錯綜しているのである。中国の多様性の尊重はアナーキズム(無政府主義)の尊重へ結びついていくのである。

藤村幸義 雷海濤 編(2019.4)『飛躍するチャイナ・イノベーションー中国ビジネス成功のアイデア100』中央経済社

本書は日本日中関係学会(会長:宮本雄二 元中国大使)の中に設けられている「中国ビジネス事情学会」での議論をベースにしたもの(はじめに V)で、藤村氏は拓殖大学名誉教授、元日本経済新聞論説委員、雷氏は桜美林大学教授、元東芝中国室長である。現実の日本と中国のビジネスにかかわっていた人たちが作った本である。

中国は「一帯一路」戦略のように積極的に「面」を作っていこうとするが、日本は「点」にこだわり、「点」に問題があると納得できず、しっかりした事前調査と詳細な計画書がないと動き出さない(p.47)。中国経済は第一段階=1978年末にスタートした改革開放政策を試行錯誤しながらも一步一步進めていった時期、第二段階=2001年のWTO(世界貿易機関)加盟をきっかけに、一気に高度成長の道を通った時期、第三段階=2010年代からで中国人の生活水準が高まっていくが、経済成長率は減速し、以前のような高度成長は期待できない—という三段階を経てきている(p.159)。世界の経済大国となった中国に対する米国の警戒心が高まり、米中間での経済摩擦が一気に激化しているが、それはかつての日本が米国から受けた仕打ちと同じで、日本は経済成長を果たして世界第二位の経済大国となった1970年代以降に米国からの標的になり、繊維、自動車、ハイテクなど多くの分野で日米経済摩擦を引き起こされて、結果、日本は度重なる攻撃に耐えきれず、長期にわたる経済停滞の局面に入ってしまう。

日本の輸出入総額の相手国は2007年に中国が米国を抜いてトップに躍り出て、それから2017年までの10年間、中国は一貫してトップの座を占めて、中国との関係が重要であることは誰もが認めざるを得ない。「米国追従」だけでは日本の国益を損ねてしまうから、ほかの国ともバランスよく付き合っていく必要がある(p.162)、中国を無視することはできない。日本は「中国市場観」を大きく変えてしかなるべきなのに、現実には、日本企業が競争力、優位性を有していた1990年代の中国市場観が今でも日本には根強く残っている(p.48)。「上から目線」から抜け切れない日本(はじめに III)は東京オリンピック後の内需の落ち込みを考えて、巨大化していく中国市場を抜きにして、日本の将来像を描きにくいのではないか(はじめに V)と本書は言う。

まず、中国の現実を知ることから始めて、日本と中国の相違点、類似点を比較文化的に探求していく必要がある。日本は外国をランキング付けして、上のランキングの国のこ

としか考えないくらいがあるが、それでは今後の世界で上手くやっていけないであろう。

Ⅱ 語学・文学・歴史・哲学関連書籍考察

余華著 飯塚容^{ゆとり}訳 (2019.1) 『活^いきる』中央公論新社 中公文庫

本書は『活きる』(2002年3月 角川書店刊)に中島京子氏の解説を加え、文庫化したものである。(奥付けの前頁の記載による。)余華氏は1960年、杭州生まれ。伝統的なリアリズムの枠組みを打ち壊した新しさと実験性が小説にあったので、同時期に登場した若手作家、蘇童、格非らとともに「先鋒派」と呼ばれた。(訳者あとがき pp.316-317。)

『活きる』は余華の長編第二作目で、1993年に上梓され、翌年には張芸謀監督によって映画化され、同年、カンヌ国際映画祭で審査員特別賞と主演男優賞を受賞している。(「解説」 中島京子 p.323。)本作品は日中戦争後から国共内戦、中華人民共和国建国、毛沢東の大躍進、文化大革命を時代背景として、主人公の大地主の息子、福貴^{フクキ}が若いころの放蕩三昧から博打で土地を巻き上げられ、借りた5畝^ムの土地で農業を行い、妻の冢珍^{チヤーチェン}、愛娘の(口と耳が不自由な)鳳霞^{フォンシャ}、息子の有慶^{ヨウチン}、孫の苦根^{クケン}に病気や医療ミスで先立たれてもなお生き続ける姿を活写した小説である。中島氏は「解説」で『活きる』という小説には、ある種の諦念というか達観のようなものと思いに支えられた、突き抜けた明るさが描かれる(同 p.328)と作家的な鋭敏な感性でこの小説の本質を言いあてている。それは中国人の極貧層の中にも存在するであろう「静かな明るさ」(同 p.328)をこの小説の中に感じ取っている中島氏の言辞であり、日本の中国観としては、中国民衆の持つ底知れぬバイタリティーへの「尊崇」の念を表しているものと言っても過言ではないであろう。

李軼倫^{いっ} (2019.2) 『ちょこっと中国語翻訳 ネイティブらしく表現するコツ』白水社

本書は著者が白水社ウェブサイトに掲載した「ちょこっと中国語翻訳」を編みなおし、加筆したもので、簡単そうで意外と訳しにくい日常会話などを課題にして、読者から訳文の投稿を募り、それを添削・解説したものである(はじめに)。

全体は6章に分かれ、第1章 取捨選択し補足する 第2章 発想の違いを考慮する などを内容としている。第2章 解説4では、日本語は「うれしい、さびしい、くやしい」など、そのままの気持ちを表現するのに対して、中国語は「あなたがやさしい(だからうれしい)」／「これから行けなくなっちゃう(だからさびしい)」／「たった一点差で負けた(だからくやしい)」など、その気持ちにさせた原因についてコメントする傾向があるようだ(p.43)と述べている。このことは、日本語と比べて、中国語の表現が使役表現を多

用することを想起させる。

第5章 原文にとらわれすぎない の解説3 では、「(宝くじに) 当たったら人生変わっちゃいそうだね」→“要是中了, 肯定会改变人生啊。”(pp.126-129) の例を挙げ、日本語が断定を避けた言い方(「そうだ」)なのに、中国語は“肯定”(きっと、必ず)という断定の意味を表す副詞を使用することを述べている。これなどは日本語の、中国語表現に比べての、婉曲表現の多用という類型の一つとして括れるであろう。

ダイレクトな気持ちを表現する(日)のに対して、原因を述べることに重点を置く(中)、婉曲表現(日)より断定する表現を好む(中)などの類型・カテゴリーの下位分類として、上記の表現をとらえる、その他の日中語の表現もある種のカテゴリーの下位分類として位置付ければ、本書はもっと斬新な日中対照表現論となるであろう。日本語表現と対応する中国語表現の類型を、一つの上位概念の下に位置付けるということである。例えば、日本語の受身表現は中国語の①“被”表現②主客転換③存在句表現④“举行”型表現などと対応する。この「対応」は直接、表現が対応しない場合も含めての「対応」という概念である。受身は日本語の受身が中国語ではどのように表現されるのかといった視点から説明されるべきであるというのが、私の考えである。

宇野精一(2019.3)『孟子 全訳注』講談社 講談社学術文庫

本書は1973年に集英社より刊行された『全訳漢文大系 第二巻 孟子』から抜粋し文庫化したものである。(奥付の前頁の記載による。)本書の「解説」の三 孟子に関する評論では吉田松陰の『孔孟余話』を引用して、松陰が程伊川や張横渠の本然と気質おうきよとに分けて論ずる性説が学問的・論理的に優れていることを承認した上で「程張は議論上のことにて、孟子は事実上の教なり。孟子の人を教る、始終人の性善を引起すことを主とす。」「程張に至りては、孟子を後立にして、荀卿・揚雄・韓愈の徒と難を構るのみ。其説愈備りてその実愈疎なり。故に孟子の書を読者、真に心を斯に留め議論に涉らず、只事実を学ぶべし」としていることを「まことに孟子の立場をよく理解したものと思う」と高く評価している(pp.489-490)。

吉田松陰の『孔孟余話』について福本イズムや『日本ルネッサンス史論』で有名な福本和夫は「孔子孟子の言説や行動ないし態度からは、「君、君たらずといえども、臣は臣たらざるべからず。父、父たらずといえども、子は子たらざるべからず」ということはとうてい演えきしがたい。それは儒教を根本理念において歪曲することによってのみ可能である。」、かの陽明学者の大塩平八郎も大いに孝を強調しても忠孝一致論、忠孝不二論ではなく「むしろ、君君たらざれば、臣は臣たらずとも可なり、とはっきり割切っていたにちが

いない。ここに松陰との顕著な相違がある。それゆえ、日本ではじめて、このような演えきというか、拡張解釈というか、いや端的に最もわかりやすくいうならば、儒教の歪曲をあえてすることによって、絶対主義理念の芽生を育成培養したものが、じつに松陰の松下村塾における『孔孟余話』であったといえる。」(福本和夫(昭和 42) p.768) と述べている。日本での『孟子』の解釈といってもさまざまである。

河上麻由子 (2019.3) 『古代日中関係史一倭の五王から遣唐使以降まで』 中央公論新社 中公新書

歴史学の中で、対外関係史は本流をなしたことがないが、①仏教がアジアの関係をどのようにとり結んだか②古代の王権を取り巻く政治状況一に注目したのが本書である (p.245)。607 年、小野妹子を使者として「日出処の天子」が記された著名な書状が隋皇帝煬帝に送られる。『隋書』東夷伝、倭国の条である。河上氏は「日出処」「日没処」の従来の理解(「日の出の勢いの国」対「夕日の沈む国」)は太平洋戦争から戦後も多く支持されたものであるが、近年、東野浩之氏によって『大智度論』というきょうろん経論(仏の教えを記した「経」とその注釈の「論」)が「日出処」「日没処」の出典であり、「単に東西を意味する表現にすぎないことが証明された」と述べている (pp.76-77)。

「日出処天子」「日没処天子」の「天子」については、従来の中華思想上の(ただ一人の)意味ではなく、『金光明経』の「天子」の意味の如く「諸天に守護され、三十三天から徳を分与された国王」(複数)と解すべきである (p.89) と言う。煬帝が倭国の書状(「書を致す」は私信に多く用いられた文書形式だった (pp.79-80)) で倭王が「天子」を自称するのは仏教後進国の王のくせに不遜であると不快感を表したのも当然であった (pp.89-89) と解釈している。

「聖徳太子」「遣隋使」「外交」「国家の面子」「対等」などの語、概念が時代や国策によって変貌してきたことが本書によって、よくわかる。「中国」という概念、イメージも、現在の日本の首相の下では、「油断ならない」「民主主義」「自由主義」とは異なる異質な国家」というもののようなものである。防衛費の増大はそのことを如実に反映している (2019 年 4 月現在)。

村井章介 (平成 31.3) 『古琉球 海洋アジアの輝ける王国』 KADOKAWA 角川選書 616

村井章介氏は日本中世史、東アジア文化交流史専攻の東京大学名誉教授。史料を読み解き、その向こうを透視する中から出てくる古琉球史の面白さを記述したのが本書である

(p.24)。「古琉球」とは「沖縄学の父」伊波普猷(柳田国男の弟子)が造ったことばで、1609年(日本慶長14年・明万曆37年)に薩摩島津氏に征服される以前の琉球を指す(p.9)。古琉球はヤマトの影響のおよぶ限界的地域であると同時に、それ自身が独自に中国、朝鮮、東南アジア、そしてヤマトと関係を結び、新たな関係性＝地域を作り出した存在で、村井氏は「海洋アジア」と呼んでいる(p.19)。琉球の国家としての存立を支える軸は明との朝貢一回賜の関係にあつて、日本が十年一貢であったのに対し、琉球は一年一貢で、1475年に二年一貢とされたが、他の諸国に比して群を抜く進貢回数を誇り、それを海禁体制を布く明が、自国商人に頼らず、海外産品を入手するために、琉球という国家に貿易会社のような位置づけを与えていた結果だ(p.183)と村井氏は述べている。琉球は、明・日本・朝鮮との関係だけでなく、対外貿易港那覇を起点とする交易ルートはシャム・パレンバン・ジャワ・マラッカ・スマトラ・パタニ・安南・スンダなどの南アジア諸国に延びていて、これらの国から買い付けた胡椒・蘇木等の産物を明に朝貢として搬入し、回賜として得た磁器等の中国特産品をこれらの国々に運ぶ中継貿易こそ琉球の最大収入源だった(p.187)。

ここ数年、村井氏の古琉球研究は①視覚的資料とりわけ絵地図の活用②ジェンダー史の導入という二つの新しい方向を模索しつつある(あとがき p.413)。

中世のヤマト人について、村井氏は次のような深い認識を記している。「中世のヤマト人は天皇の清浄な身体を究極の中心に、それを内裏、洛中、畿内、日本国、境界が順に包み込み、外に行くほどケガレの度合いが強まる、といった世界像を持っていた。この浄一穢の同心円において、異域の住人は、国内の被差別民と同じケガレにまみれた存在とされる。だが、蔑みは恐れを裏返し、夷人はまた超自然的な力のもちぬしだ。この側面を肉づけしたものが「鬼」である」(p.61)。

「日本」の中国観は「古琉球」＝「海洋アジア」の中国観を含むことによって、より豊かなものになる。「国家」が西洋近代の産物であることを本書のネガとして認識できる。

Ⅲ 文化・比較文化関連書籍考察

福永光司(2018.9)『道教と日本文化〔新装版〕』人文書院

比較文化には影響関係を主とするものと、それにとらわれないものがあるが、前者が主流で、本書も道教の日本への影響を探求した書である。福永氏は道教研究の第一人者で、従来、中国が「神のない文明」とされていたことに対して、異議を唱え、「神のある文明」の具体例として道教をクローズアップした。

昊天^{こうてん}上帝、略して上帝は中国古代思想史で否定する方向として、孔子を始祖とする儒家があり、反対の有神論としては墨家があつて(pp.44-46)、孟子は墨家を目の敵にして攻

撃したが、孟子の儒学と漢代以後の儒教との大きな転換点となった董仲舒の「天人合一論」は墨子の「天志」の理論と同じ構造をとり、上帝の「義」「意志」に沿えば賞、沿わなければ罰というものになった（pp.47-48）と福永氏は言う。

福永氏の述べる道教の日本への影響として①岡倉天心の道教と②『莊子』の「庖丁」（養生主篇）は注意をひく。岡倉天心は道教を唯物的道教と哲学的道教に分けて、前者は仏教から礼拝や儀式を取り入れたが、後者は「些事」も「大事」と同様に重要と考え、「茶道」も「変装した道教」であるとして、哲学的道教を重視した（pp.174-177）。有名な「アジアは一つである」という『東洋の理想』の冒頭の一句は現実の「多」が「道」においては「斉しい」（p.185）という意味であると福永氏は言う。

『莊子』の「庖丁」の喩えは“技”より以上のもの、すなわち“道”の体得（p.203）を示唆しているものであり、日本の茶道、書道、柔道、相撲道、修験道も老荘の「技を根底から支え、技を技として生かすものは道である」（「道は技より進めり」（『莊子』養生主篇）という技能の哲学に基づく（p.249）。

道教は仏教が流布した日本では重んじられず、また戦前は、天皇崇拝の根源が中国由来のものであっては都合が悪い（「天皇」という言葉自体、「天皇大帝」＝道教の神学における最高神という道教の言葉である）こと及び西洋崇拝（＝東洋蔑視）から研究するのがはばかられたが、現在では研究が盛んで、その背景には神秘的なものへの憧憬のエトスが根底にあるように思われる。

彭丹（2018.10）『いにしへの恋歌 和歌と漢詩の世界』筑摩書房 筑摩選書 0166

和歌と漢詩は、後者を土台として前者が生まれたが、前者には恋歌が多く、後者には恋歌が少ない、両者は相通じながら、和歌は漢詩と異なる独自の世界を創りあげてきた、その和歌の独自の世界を漢詩との比較において探求したのが本書である（まえがき p.17）。

『詩経』「閨^{じよ}離」は正しき夫婦の恋の勧めという大義名分を背負わされた恋歌（p.36）である。中国では治国平天下の政治、文学が重んじられたが、日本では①女性の地位が高かったこと②平和であったこと——等により、天皇は「好色」（常に相手を新たにし、即興で恋歌を詠むという条件を満たしつつ、恋に情熱を燃やすこと（p.45））を重んじ、恋歌を詠み、『新古今集』などの勅撰和歌集を作った（p.49）。

彭丹氏は13世紀以降、異民族の元の統治によって、漢文化はその流れを大きく変え、和と漢の文化はそこから枝分かれしていったから、本書では13世紀以前の詩歌に的を絞って探求する（p.262）と言う。

和歌が漢詩と異なる独自の世界を創りあげてきた方法の一つとして、村田珠光の「和漢の境を紛らかす事」を援用し、和物・唐物に拘泥しないところから「わび」が生まれたように、和歌と漢詩も同様に、葛藤の中から和歌の世界に「もののあはれ」が現出した (p.265) と言う。和歌と漢詩の不滅の生命力の源は「人間の寂しさ」であるとする (p.265) 彭丹氏には大陸中国での苛酷な思い出 (政治によって深く高い文化が踏みにじられた思い出) が根底にあるようだ。氏は異国で「和漢の境を紛らかす事」を行っている、自らを相対化する眼を持つ比較文化学者である。

小林忠 (2018.11) 『日本水墨画全史』講談社 講談社学術文庫

奥付によると、本書はペリカン社より 1991 年、1992 年に刊行された『墨絵の譜—日本の水墨画家たち』全二巻を改題し、合本にして文庫化したものである。

24 人の日本の水墨画家を取り上げ、論じているが、日中比較文化学的視点の論述もみられる。黙菴靈淵 (もくあんれいえん) は「本朝最初的水墨画家」である。その「四睡図」は三人と虎の一团を描いているが、夢の中の世界のようにとらえどころがなく、中国の水墨画のように「物体の質量や空間の深淺が」「説得的に表現されている」(p.47) ということがない。「日本文人画の祖」である玉腕梵芳 (ぎょくえんぼんぼう) の絵は「平面的で装飾性に流れやすく、軽薄なほどに新しさを好む傾向」があるが、それは中国人の「伝統を重んじ、しかも現実から離れようとしなない強固な保守的な体質がもたらした作画上の規範」=南齊謝赫の“画之六法”一とは異なるものである (pp.56-57)。村田珠光 (1423-1502) は「和漢の境をまぎらかす」ことを重視したが、それは 15 世紀末葉から 16 世紀初頭にかけての文化史的状況の特質であり、連歌、能楽、立花、水墨画はその体現であった (pp.100-101)。相阿弥も「和漢の境をまぎらかす」努力をした水墨画家であるが、さらに一步を進めて、「和」に居直り、「我」を表そうとすれば、相阿弥の水墨画はそのまま長谷川等伯の「松林図屏風」へ直接につながっていくだろう (p.106) と小林氏は述べている。

「中国の理詰め水墨画はその急所をついに日本人はつかめなかったようだ。叙事的な文章を苦手として抒情的な詩を得意としたこの国の人、墨おだやかに筆軽く、半島の人とこれだけは違って、淡白と清麗、そして時に豪奢、放胆の美質を愛してきた。」(p.472) と小林氏は日本の水墨画を総括している。やはり日本は感性文化ということであろうか。

別冊 炎 芸術 (2018.12) 『天目 てのひらの宇宙』阿部出版

福建建窯の黒釉茶碗の中で最も評価の高いのは曜変 (漆黒の釉の上に銀色に輝く星のような斑紋が浮き出し、そのまわりに虹色の光彩があらわれた黒釉茶碗) で、日本で国宝に

指定されている陶磁器 14 点のうち、3 点が曜変であるのは、日本人がこの焼き物にいかにか魅せられてきたかを物語っているが、中国にはなく、日本にのみ残っている (p.28)。このことについて、法政大学の彭丹氏が著書 (2012) 『中国と茶碗と日本と』小学館で、曜変は中国では不吉の兆しとされて忌み嫌われ、窯から出るとすぐに壊されてしまったために中国には存在せず、日本にある曜変は壊されそうになったものを救い出した者から貿易商人の手を経て日本に運ばれたのではないかという斬新な説を示した (p.29) が、近年、中国で曜変の破片が発見され (2009 年 杭州出土 p.30 下写真)、彭丹氏の説は成り立たなくなってしまう (p.29)。

中国では喫茶法の変化 (点茶=大きな茶碗で粉状の茶に湯を注いで攪拌する方法 から泡茶=茶葉に湯を注ぐ方法 への転換)によって 14 世紀を境に黒釉茶碗の生産が急速に衰えたが、日本ではそれ以後も、古い喫茶法である点茶と黒釉茶碗の流行が続いた (p.31)。柳田国男の言語圏論を彷彿とさせる文化的事実である。日本はなぜ点茶を残したのか。古いものを残して失うことなしに、新しいものを迎え入れる不二一元論アドヴァイティズムの精神が日本にはあると言ったのは岡倉天心 (『東洋の理想』「理想の範囲」の章) であった。

武藤秀太郎 (2019.2) 『「抗日」中国の起源 五四運動と日本』筑摩書房 筑摩選書 0171

中国では「近代」と「現代」を区切る一大転換点として五四運動を位置づけ、毛沢東は (1940) 「新民主主義論」で「中国ブルジョア民主革命」は五四運動を境に担い手がプチ・ブルジョアジーとブルジョアジー (有産階級) からプロレタリアート (無産階級) へ変化したと言っている (pp.16-17)。竹内好は毛沢東の「新民主主義論」を基本的に踏襲し、デューイの五四運動論に準拠して、「内発的」な五四運動と「外発的」な明治維新という図式を (1961) 「方法としてのアジア」で提出している (pp.45-46)。それは日本人の、「尊崇」の中国観=自己卑下、自虐の日本観であった。

「反日」と「親日」(「親日」は中国では貶義語である)、「反日」と「哈日」(日本尊崇派) は二項対立的概念で、著者武藤氏は採らない。著者は「抗日」と「知日」を共存しうるものとしてとらえ (pp.52-53)、それら二つをキーワードにして、中国人の日本観を読み解いていく (p.53)。「抗日」は①侵略の歴史を直視せず、領土を不当に占拠する日本人②日本に媚びる裏切り者の中国人③不当な日本に怒りを爆発させる中国人の若者一という三つの要素によって成り立っている (p.28)。ブルース・リーの (1972) 『ドラゴン 怒りの鉄拳』も「抗日」の映画であった (p.24)。

五四運動と大正デモクラシー運動は密接不可分につながりあっていて、国家の枠組みを

超えたトランスナショナルな思想運動 (intellectual movement) であった (p.20)。明治維新後、日本が初等教育の充実に力を注いだのに対して、中国では清末の教育体制は高等・大学教育の充実が図られた (p.93)。中国の教育体制の充実や中国人留学生支援に東京帝大の服部宇之吉や服部の妻 (秋瑾の面倒を見た) が尽力している (pp.138-143)。

20世紀初頭に日本人教師も中国に渡り、1906年のピークには500~600人がお雇い外国人として中国で教え、一時、中国の教育分野でのお雇い外国人の座をほぼ独占した (pp.141-146)。もっとも、内容面や暴力など一部、問題教師はいた。

吉野作造は五四運動と日本の関係で無視できない人物で、袁世凱の息子、克定の家庭教師をして、1906年の初めから約三年間、中国に滞在した (p.216)。吉野は五四運動の際、中国人留学生を献身的に支援したが、それは吉野に留学生の動機への強い共感があったからである (p.253)。

本書は、五四運動の担い手を生み出した中国高等教育機関の成り立ちと日本との関係にスポットライトをあてた書である。ほかに、朝鮮の三一運動や中国国民党、軍閥、商工業者など、さまざまな観点から五四運動を描くことが可能であり、著者は本書が呼び水となって、100周年を迎える五四運動の研究が活発になることを願っている (あとがき p.289)。

本書は、日本と中国の人の往来を視野に入れて、中国人の日本観を明らかにすることを目論んだ、五四運動についての比較文化学的な書である。国際化時代の研究とは、こうしたものが中心になるのが本来の姿であろう。細かい「分析」だけではなく「総合」を視野に入れた研究が必要である。

王敏 (2019.4) 『平和の実践叢書 2 嵐山の周恩来 一日本忘れまじー』 三和書籍

日中比較文化学者、王敏氏の本書の眼目は1919年4月4日、5日の両日、周恩来が京都の嵐山を逍遥し「雨中嵐山」「雨后嵐山」の二詩を作ったことについてのフィールドワークと推定を述べた第一章「雨中嵐山」の誘い、第二章「雨中嵐山」の逍遥考にある。

1919年4月6日は清明節 (中国では祖先祭祀の日) で、4月4日、周恩来は偶然、日本の禹王・角倉了以の銅像に嵐山の亀山公園で遭遇し、さらに大悲閣千光寺 (黄檗宗の寺。日本の禹王・角倉了以の木造が安置されている。) の存在を知った、禹王への敬虔な気持ちをつのらせてもう一度、翌日、嵐山へ来ようという気持ちが周恩来の心に自然に生まれたのであろう (p.71)、翌4月5日の嵐山逍遥の目的は祖先祭祀と禹王を祀ることであった (p.79) と王敏氏は推定する。

嵐山のフィールドワークの結果、周恩来は1919年4月4日、京福電鉄嵐山駅下車の後、

天竜寺、亀山公園（現在、南口の近くに周恩来総理記念詩碑（正面に周恩来の「雨中嵐山」が刻まれている）があり、詩碑の近くに角倉了以（1554－1614）の銅像が立っている）と桂川右岸を遊覧し、翌4月5日の二日目、渡月橋を渡り、大悲閣千光寺まで登った（p.43）と王敏氏は推定する。

嵐山京福電鉄の古刹、名刹の漢字の並ぶ駅名（ex.鳴滝、帷子ノ辻、鹿王院等）に漢字圏の人間ならその美しい音色（発音）に魅せられる、2018年に800万人の中国人旅行者が訪日した背景に、こうした永久に衰えない京都の「漢字風」の魅力が根本にあると信じる（p.85）と王敏氏は言う。「漢字」で考える中国人。「漢字」と「カナ」の使い分けの日本人。

周恩来の4月5日の二作の詩作のうち、「雨中嵐山」の最後の部分“人間的万象真理，愈求愈模糊。一模糊中偶然见着一点光明，真愈觉娇妍”（世のもろもろの真理は求めるほどに模糊とするも一模糊の中にたまさかに一点の光明を見出せば真にいいよなまめかし）（p.34）の“娇妍”の日本語「なまめかし」では意味が色っぽい感じとなり、適切でない。日本語としては「あでやかだ」ぐらいがいいのではないだろうか。その前の部分の“潇潇雨，霧蒙浓，一线阳光穿云出，愈见娇妍”（雨濛々として霧深く 陽の光 雲間より射していいよなまめかし）（pp.34－35）とある「なまめかし」も「あでやか」にしたほうが適切であろう。

蛇足ながら、筆者は1978年の周恩来総理記念詩碑建立に中国語の通訳補助として参加した。孫平化氏の流暢な日本語と柔和な笑顔が印象に残っている。

IV その他

E・シャヴァンヌ 菊地章太（2019.6）『泰山—中国人の信仰』平凡社 東洋文庫 895

本書はエドヴァール・シャヴァンヌ著（1910）『泰山—中国人の信仰に関する試論』のうち、第一章「泰山の信仰」第二章「泰山の史跡」第六章「泰山の民族」及び「結論」を訳出したものである（凡例 一 による）。

著者のシャヴァンヌは1865年10月5日にフランスのリヨンに生まれ、国立東洋語学校（現フランス国立東洋言語文化学院）の教授であったコルディエの勧めで中国史の研究を行い、1889年からフランス公使館員として4年の間、北京に滞在し、そのおり、司馬遷の『史記』の全巻の翻訳に着手して、最初に「封禪書」を訳し、ついで漢代画像石の研究を公刊している（pp.290－291）。1907年、シャヴァンヌは華北調査旅行を行い、その主要目的は一、漢代画像石の研究、二、北魏仏教石窟の研究、三、唐代陵墓彫刻の研究であったが、本書の泰山信仰の考察を漢代画像石や北魏仏教石窟、唐代陵墓彫刻の考察に先駆け、

堂々たる研究書として完成している（訳者 解説 pp.294—297）。

元来、泰山は一自然神で、それは本質的に自然とのつながりを重んじた宗教である道教的な信仰に属する神であったが、唐代の6、7世紀に仏教の影響で道教は因果応報的な心の領域にかかわるものを取り入れるようになり、一つは城隍神じょうごうという都市を守護する神の信仰へ、もう一つは死者の魂を迎え入れる泰山の信仰という二つの方向へと展開した（pp.36—37）。泰山の山頂と山麓で行われた封禪のまつりについては史書にも幾たびか記されてきており、「封」のまつりは天に向けられ、「禪」のまつりは大地に向けられていて（p.38）、『史記』の秦の始皇帝の28年（BC219）の条にも「始皇帝は泰山の山頂にいたり、石を立ててみずからの徳をたたえ、封のまつりを成しとげたことを告げた」（pp.39—40）とある。封禪のまつりは前漢の武帝に始まり（BC110）、後漢の光武帝、唐の玄宗、則天武后も行っている（pp.40—41）。封禪のまつりの最も重要な目的は王朝の完成を天と地の神に告げることであった（p.43）。つまり、封禪のまつりは自らの「皇帝」としての地位を天下と天に告げる象徴的、かつ具体的行為であったと言えよう。こうした歴史を踏まえた象徴的、かつ具体的行為は中国的であると言ってよい。

村田右富実みぎふみ（2019.6）『令和と万葉集』西日本出版社

本書は「令和」新年号と「典拠」の関係について書かれた本である。首相官邸発表では「令和」は「万葉集の梅の花の歌、三十二首の序文の「初春の令月にして 気淑く風和ぎ 梅は鏡前の粉をひら抜き 蘭ははいご珮後の香をかおら薫す」から引用したもの」（p.14）としているが、マスコミ報道は①「初めて国書から採られた年号だ」といったもの（首相官邸発表はその立場）②『万葉集』から採られたといっても、もとをたどれば中国文学じゃないか」といったもの——という大きく二つの流れに分かれていた（p.1）。①は日本の小中華主義の主張②は中国尊崇や引用淵源追及の立場からの主張であろう。村田氏は「令和」と、『万葉集』や『文選』（張衡『帰田賦』などが収められている）などとの関係を明らかにし、本書をきっかけとして『万葉集』に興味を持つ人が増えることを『万葉集』研究者として嬉しく思うと述べている（p.3）。

「令和」の【典拠】（村田氏は全体の枠組の典拠と部分的、直接的典拠を分けて、後者を【典拠】と表記している。）は天平元年（729年）の長屋王の変の翌天平二年（730年）、大伴旅人によって開催された梅花ばいかのえん宴に関連した「梅花の歌三十二首併せて序（＝以下、「梅花歌の序」と記す）であり（pp.51—54）、その中の「時に初春の令月にして気淑く風和ぐ」が「令和」の出所であるが、その【典拠】は張衡『帰田賦』の「於是、仲春令月、時和気清」（是に、仲春の令月にして、時和し気清し）であり、「梅花歌の序」の全体的枠組の典

抛は王羲之の『蘭亭序』であると言う (pp.80-83)。「梅花歌の序」は詩序 (漢詩集などの序文) を文章の枠組にしつつ、状況的に類似する『蘭亭序』の表現を用いて、数多くの【典抛】を駆使して組み立てられていて (=換骨奪胎して)、その【典抛】の一つが『帰田賦』であると村田氏は言う (p.104)。

現代はオリジナリティを非常に重視するが、奈良時代の教養は【典抛】のある文章を書くことにあり、多様な【典抛】は友人との感覚共有のためにあったと言ってもよい (pp.115-122)。

『帰田賦』は「梅花歌の序」のたくさんある【典抛】の一つに過ぎず、『帰田賦』が政治家として失敗し、田舎に帰ろうという内容の文章で、陶淵明の「帰去来の辞」の先駆けとなる作品であろうと、典抛を持った表現は時間の経過とともに、その表現に典抛があったことすらわからなくなり、それが典抛のあるべき姿なのであるから問題はなく (p.121,p.111) 内容にこだわる必要はないと村田氏は述べている。

本書は文章の形式における伝統 (日本の奈良時代や、そのもととなる中国の伝統) と「元号という政治」 (p.35) の関係を明瞭に説明した、日本の小中華主義と中国尊崇の両方を立てた、調和志向の「令和」についての本である。図らずして、そこに日本の中国観 (尊崇、小中華主義) が顕現している。

3 結語

日本の中国観は大きくは「尊崇」「脅威」「小中華主義」の三つに分けられるが、「小中華主義」は時代の趨勢で支持されたこともあったことを河上 (2019.3) は教えてくれる。「尊崇」にしろ、微妙な差が生じて、日本的なものが生まれてきたことは彭丹 (2018.10) 小林 (2018.11) 別冊炎芸術 (2018.12) によって知ることができる。「脅威」の念の反対が軽侮の念であろうことは藤村 雷 (2019.4) を通して理解できる。日本の中国観の考察は、日本自体を自覚して知ることに通じている。

〔引用文献・参考文献〕

- (1) 福永光司 (2018.9) 『道教と日本文化 [新装版]』人文書院
- (2) 彭丹 (2018.10) 『いにしへの恋歌 和歌と漢詩の世界』筑摩書房 筑摩選書 0166
- (3) 小林忠 (2018.11) 『日本水墨画全史』講談社 講談社学術文庫
- (4) 別冊炎芸術 (2018.12) 『天目 てのひらの宇宙』阿部出版
- (5) 楊繼繩著 辻康吾編 現代中国研究会訳 (2019.1) 『文化大革命五十年』岩波書店
- (6) 古畑康雄 (2019.1) 『精日 加速度的に日本化する中国人の群像』講談社 講談社+α新書

- (7) 余華著 飯塚容訳 (2019.1) 『活きる』中央公論新社 中公文庫
- (8) 武藤秀太郎 (2019.2) 『「抗日」中国の起源 五四運動と日本』筑摩書房 筑摩選書 0171
- (9) 李軼倫 (2019.2) 『ちょこっと中国語翻訳 ネイティブらしく表現するコツ』白水社
- (10) 宇野精一 (2019.3) 『孟子 全訳注』講談社 講談社学術文庫
- (11) 河上麻由子 (2019.3) 『古代日中関係史—倭の五王から遣唐使以降まで』中央公論新社 中公新書
- (12) 王敏 (2019.4) 『平和の実践叢書2 嵐山の周恩来 —日本忘れまじ—』三和書籍
- (13) 藤村幸義 雷海濤 編 (2019.4) 『飛躍するチャイナ・イノベーション—中国ビジネス成功のアイデア100』中央経済社
- (14) E・シャヴァンヌ 菊地章太 (2019.6) 『泰山—中国人の信仰』平凡社 東洋文庫 895
- (15) 村田右富実 (2019.6) 『令和と万葉集』西日本出版社
- (16) 福本和夫 (昭和42) 『日本ルネッサンス史論』東西書房
- (17) 藤田昌志 (2010) 『日本の中国観—最近在日本出版中国関連書籍報告— (04.9—09.8)』朋友書店
- (18) 藤田昌志 (2015) 『日本の中国観Ⅱ—比較文化学的考察—』晃洋書房
- (19) 藤田昌志 (2018) 『比較文化学—日本・中国・世界—』朋友書店
- (20) 藤田昌志 (2007) 『日中対照表現論』白帝社
- (21) 藤田昌志 (2017) 『日中対照表現論Ⅱ—事例研究を中心として—』朋友書店